

 はじめに

英語で行われる大学院授業のシラバスは日本語で書くことは禁じられていますので、リンクしたこちらに補助的説明を日本語で書くことにします。

私は、2016年度にも大学院で academic skills に焦点をあてた授業を春学期と秋学期に開きましたが、登録者が非常に少なく、授業としては成功とは言えない結果になりました。英語を母国語とする者が誰もいない状況で、英語だけで授業をする難しさ（あるいは不自然さ）に私自身も慣れなかったということがあると思います。

その反省をふまえ、3年ぶりに再度、英語による授業を開くことになりました。2016年度の苦い経験から学び、以下のような方針で授業を行うことにしました。（Q1 で開く Qualitative Social Work Research、Q2 で開く Social Work with Self-help Groups も全く同じ方針で行う予定です。）

- ルール1. 100分間の授業が間延びしないように授業時間に区切りをいれる。
- ルール2. 聴く、読む、書く、話すという4つのスキルが身につくように工夫する。
- ルール3. 「英語が苦手、でも学ばなければいけない」という学生に焦点をあてる。
- ルール4. 英語を使いこなす能力（以下、語学力）には個人差が大きいことをふまえ、授業開始時点の各個人の語学力を参考に評価を行う。
- ルール5. 学生どうしのディスカッションの時間を設けるが、（各自、自己申告による）語学力別にグループを分けたり、ランダムに分けたり、工夫する。
- ルール6. おそらく英語が苦手な学生がもっとも不安なのは、聴き取りの部分なので、教員の私が話す内容は、プリントアウトして授業時間中に配布する。
- ルール7. 「英語ネイティブの教授が行う講義」を模倣するのではなく、海外でのアカデミック・コミュニティ（そこでは英米の発音は少数者）で使われる英語になれってもらうための授業とする。

授業の区切り

以下のように 100 分授業に区切りをつける予定です。

- | | |
|------|--|
| 5 分 | 出席、配布資料の準備 |
| 20 分 | 講義（内容は配布する予定）。Listening 最後に問題を出す。 |
| 20 分 | 講義に関連する英文（論文または参考書）の一部を読む（事前にロヨラ経由で配布する）。教員が個別に質問に答える（個別に話すときは日本語で）。同時に、問題について自分の考えを英語でメモし、まとめる。 |
| 20 分 | 各自のメモに基づき、グループでディスカッションする。（自己申告による語学力別、あるいはランダムにグループに分ける） |
| 5 分 | 休憩 |
| 25 分 | 個人のプレゼンテーション（自分の考えや経験を、自分の語学力に応じた内容で話す。ひとり 5 分程度） |
| 5 分 | フィードバック（日本語による） |

教員（岡）の英語経験

上智大学の有名な英語学の教授がいうには、「英語で教える授業では、英語の発音が下手な先生のほうが良い。なぜなら、そのような英語でも海外で活躍できると学生たちが思えるから」だそうです。そう考えると、皮肉なことに私には、良い英語の授業ができる資格があります。

というのも、はっきりいって、私の英語の語学力は、たいしたものではありません。海外に連続で住んだことは 5 ヶ月が最長で（アメリカ）、しかも幼児を 2 人もつれて家族といっしょだったので現地の人たちとは交流はほとんどありませんでした。したがって日常会話は、あまり上手ではありません。大学での専攻は数学でしたので、語学とは全く無関係です。英米のニュース英語を聞いても、そんなにわかるわけではありませんし、英語の映画にいたっては、ほとんどわかりません。

しかし、そんな私でも英語使用に関連して、以下のような経験があります。たぶん私の話す英語を聞かれると、「この程度の英語でもこれだけいろいろできるんだ」と意外に思われることと思います。

- ①. University of Wales（イギリスの国立大学、現在の名称は Cardiff University）で 2003 年に博士号（PhD）を取得しています。英語で博士論文を書き、英語による口頭試験にも合格しています。（イギリスの博士課程は、個別指導だけなので、University of

Wales で英語の授業を受けたことはありません。Part-time student だったのでイギリスでは年に1ヶ月程度、滞在するだけでした。) 私の博士論文は researchmap から以下のリンクをクリックしていただくと全文ダウンロードできます。

https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=248004

- ②. George Mason University (アメリカの州立大学) の連携教授(Affiliate Professor)として研究室をもらって研究していました (2003-4年、5ヶ月間。授業はしていません)。
- ③. 日米教育委員会フルブライト事業の研究者プログラムに採用され (採用試験では英語によるインタビューがあります) アメリカで研究する機会を与えられました。上の②と同じです。
- ④. 現在3つ (廃刊になったものを含めると4つ) の国際専門雑誌の編集委員会のメンバーであり、さまざまな国から投稿された論文を読み、審査をする仕事をしています。Qualitative Social Work (2001年-現在, Sage社)、The Qualitative Report (2005年-現在, Nova Southeastern University)、Voluntaristics Review Brill Research Perspectives (2017年-現在, Brill社)、International Journal of Self-Help and Self Care (2010年-2014年廃刊, Baywood社)
- ⑤. 大きな国際会議の企画に委員会メンバーとしてかかわったことがあります。香港で2010年に開かれた Joint World Conference on Social Work and Social Development (世界で最も大きな社会福祉に関する国際会議) で International Programme Committee のメンバーとして、2016年にシンガポールで開かれた International Conference on Social Work in Health and Mental Health においては International Advisory Group のメンバーとして国際会議の企画に参加しました。
- ⑥. 英米の学術出版社 Sage 社が 2010年に発行した The Sage Handbook of Social Work Research の Advisory Board のメンバーでした。
- ⑦. 国際会議から招待を受けて英語でスピーチをしたことがあります。2010年に香港で The International Conference on Promoting Chronic Care: Towards A Community-based Chronic Care Model for Asia、2016年にシンガポールで International Conference on Social Work in Health and Mental Health (既述) が開かれ、そこで自助グループについて講演しています。
- ⑧. 国際会議ではよく英語で発表しています。1988年、30歳のときに始めて北京で発表し、それ以後30年間で (2019年3月現在で) 42回発表しています。そのうち36回は私自身が発表し、残りの6回は共同研究者が発表しています。また42回のうち1回を除いてはすべて海外で開かれた学会です。

この授業について、ご意見、ご希望、質問等がありましたら、私にメールください。お待ちしております。t-oka@sophia.ac.jp